

エカテリンゴフ園遊頌詩論考 —D.フヴォストフの詩 (1824) に対するコメンタリイを通して

坂 内 徳 明¹⁾

The Ode to the Public Fair *Gulyanie* at Ekateringof —An Explication to D.I.Khvostov' Ode (1824)

Tokuaki BANNAI

要 旨

18世紀～20世紀初頭ロシアの都市の広場や通りで、謝肉祭、復活祭、クリスマス週間、戦勝記念日をはじめとする各種の祝祭日に行われたグリャーニエと呼ばれる現象（日本語の「園遊」「縁日」「遊歩」をあてる場合がある）は、革命前ロシアの都市住民（貴族、庶民を含む）の生活・習俗にとってきわめて重要なファクターだった。それは、娯楽・遊戯を中心に彼らの習俗文化を考察し、同時期の民衆文化史を再構築する上で不可欠な側面である。本稿では、ロシア革命前の帝都ペテルブルク市外エカテリンゴフの地で春の初めの時期に開催されたグリャーニエを取り上げ、特に1824年にその祝祭が復活されたことを祝賀する目的で、詩人D.I.フヴォストフが同年5月に発表した頌詩“1824年エカテリンゴフ五月園遊”を検討対象とした。具体的には、詩のテキストに対してコメンタリイを付す作業を通して、作品に描かれた表現が、詩人のテーマとして歌われる、祝祭の復活に中心的役割を果たしたM.A.ミロラドヴィチに捧げた頌詩であることを確認すると同時に、時に、その枠を越えて、同時代の社会と習俗を鋭敏に切り取っていることを検討・指摘した。さらに、この詩の背後に見える、同時代の文化史の諸相を明らかにしようとした。

ABSTRACT

The Russian public fairs called *narodnoe gulyan'e* were the main entertainment until the middle of the nineteenth century in Russian cities, particularly for St.Petersburg's citizens. These traditional folk fairs included a variety of amusements, rides, booths, and games. During carnival (*maslenitsa*) and Easter weeks, *gulyan'e* regularly took place on Petrovskaya, Teatral'naya, and Admiralteiskaya squares. Ekateringof was the location for fairs on May Day and Whitsunday, and Ekateringof-gulyan'e was so characteristic because of its history and development.

Ekateringof located in a suburb of the imperial capital was one of St.Petersburg's first country residences. It has traditionally been considered a memorial in honor of the first Russian naval victory and was granted to Ekaterina the First by Peter the Great as her residence (*usad'ba*). After that the Ekateringof park-garden had been almost abandoned, but in the 1820s this place had been bought back to life owing to the great project drawn by the governor-general and the Mayor of St.Petersburg M.A.Miloradovich.

In the regenerated park-garden the fair started in the beginning of May in 1824, and to this big event was dedicated a long and profound ode 《Popular fair at Ekateringof in May》by an old “bard” D.I.Khvostov. In this article we examined this long poem thoroughly, gave annotations and explicated passages in the cultural-historical contexts.

¹⁾ 放送大学東京多摩学習センター 所長

I-1

1828年7月にウクライナのネージンのギムナジウムを卒業した19歳の未来の作家ニコライ・ゴーゴリは、同年12月、官途に就くためにペテルブルクへ上京した。彼の首都体験は『外套』『鼻』など数篇の作品からなる“ペテルブルクもの”として結実するが、予想をはるかに越える北国帝都の陰鬱さの中で、彼は郷里の母親や妹に宛てて何通もの手紙を書き送っている。そこには、生活上のストレスだけでなく、すでに芽生えている入念な観察眼を読み取ることができるが、その一通は首都の有り様を次のように伝えている。

ペテルブルクにはグリャーニエが数多くあります。冬は暇をもてあました連中が皆、12時から2時まで（この時間帯に勤務人は忙しいのです）ネフスキ大通りを歩きまわっています。一方、春には、もっとも、この時期には樹木はまだ緑になっていないので、春と呼べるとすればですが、エカテリンゴフや夏の庭園、そして海軍省並木道を散策しています（1829年4月30日付）¹⁾

ここでゴーゴリが記したグリャーニエгуляньеとは、その後で言及される「歩きまわる、散策する」というロシア語動詞гулятьから派生したもので、本来は散歩・ぶらぶら歩きを意味し、さらに、ネフスキ大通りの往来に示されるように、ほぼ一定した場所と時間における慣習化した群衆の出歩き・散策のことである。しかし、グリャーニエはそれにとどまらない。グリャーニエ、あるいは「民衆の」を意味する形容詞が付されたナロードノエ・グリャーニエは、18-19世紀ロシアの都市の広場や大通りを舞台として大きく展開されていた祝祭（園遊・遊歩・縁日）を意味し、革命前ロシアの都市住民の娯楽・遊戯を中心とした日常生活を考える上で不可欠な文化現象であった。場所はモスクワ、ペテルブルクとも、市内・郊外の広場をはじめ庭園・パークや森など、日時は謝肉祭、復活祭、年末から年始にかけたクリスマス週間の他、キリスト

教ならびに異教の祭日、戦勝記念日や国家祝日などがあてられた。そこは、戸外のそぞろ歩きを基本に、仮設の見世物小屋や大滑走台、メリーゴーランドやブランコ、観覧車、軽食・カフェなど多くの遊戯・娯楽・飲食施設が準備され、放浪楽士や熊遣い、人形廻しをはじめとする各種の大道芸人ならびに街頭物売りがそれぞれの“技”を競いあう中、庶民大衆が、時に貴族・上流階層の人々も加わって皆が闊歩し浮かれ騒ぐ一大祝祭空間であった²⁾。

ところで、ペテルブルクでグリャーニエが開催される場所の一つとしてゴーゴリがあげたエカテリンゴフに関して、近年いくつものモノグラフが相次いで刊行されている³⁾。その歴史（場所の由来、園遊の開始・発展から衰退まで、特に20世紀初頭～前半に生じた大きな変化、さらに現状ならびに現代の再建計画まで）、各時代における様相、その場と祝祭の具体像はほとんど調査され尽くした感がある。しかしながら、こうした研究史を前提とした上で、本稿著者の関心は、エカテリンゴフ祝祭の全盛期とも言える1820-30年代、すなわち、上記ゴーゴリが書き残した時代のエカテリンゴフに注がれる。特に、18世紀初頭に生まれ、一時は皇帝らにより活用されたにもかかわらず、18世紀末以降、荒廃していたかに見えるエカテリンゴフでの園遊が1823-1825年段階で復活された事実に着目する。さらに、重要と思われるのは、この復活を機にいわゆるジャンルを越える形で《エカテリンゴフ記》とでも呼ぶことができるいくつもの試みが生まれたことであり、このことは決して偶然とは考えられないのである⁴⁾。そうした試みとして、本稿筆者の念頭にあるのは、1824-25年のエカテリンゴフ・グリャーニエを描いたテキスト—Д.И.フヴォストフ作の頌詩、K.K.ガンペリン作のパノラマ図、Ф.В.ブルガーリン作のルポルタージュであり、本稿ではフヴォストフの詩作品を取り上げることとする。

I-2

本論に入る前に、エカテリンゴフとそのグリャーニエ（特に、その復活）について概略しておく⁵⁾。

¹⁾ Гоголь (1979: 57)。彼は、この引用文に続き、祭りへ行く箱馬車の列が10露里も続き、埃が舞い上がり、窮屈で、エカテリンゴフのグリャーニエは耐えがたい、と記している。

²⁾ 革命前ロシアのグリャーニエについては、А.Ф.ネクルイロヴァの仕事(1984)がある(拙訳『ロシアの縁日』1986年、平凡社)。特にペテルブルクのグリャーニエに関してはА.М.コネチヌイによる一連の仕事が欠かせない。彼の仕事の全体像と意味については、坂内(2016)に詳しい。

³⁾ Баторевич(2006)、Кормильцева и др.(2004)、Ходанович(2011; 2013)。こうしたモノグラフが刊行されたことの背後には、ベレストロイカ期以降に始まるロシア遊戯文化研究の高まりがあるが、その問題点については、上記注2にあげた坂内(2016, 注2, 28)に記した。

⁴⁾ 19世紀初頭以降のロシア国家・社会の展開と対ナポレオン戦争、それに勝利したことによる高揚感と飢餓感が生まれ、社会が「急進化」していく中で、ロシア民衆文化が娯楽・遊興へと傾斜していったことが《エカテリンゴフ記》誕生の背景にあると考えられる。そして、本稿では十分に明らかにできず、今後の大きな課題とせざるをえないが、1824年5月に再興されたエカテリンゴフ園遊から半年後に起きた11月の大洪水、さらにほぼ一年後の「デカブリスト反乱」といった社会的事件と1824年祝祭との間に存在すると思われる関係性が著者の主要な関心である。

⁵⁾ 概略は、上記注3にあげた文献の他、Андреев(1995)、Чеканова(2004)、Сады и парки СПб.(2004)を参照。エカテリンゴフの再建プランが2004年に発表されたが、Кормильцева и др.(2004)に詳細が紹介され、全体施設の完成図もある)、工事は着手されず、現時点(2017年夏段階)で完全に放棄されている。

エカテリンゴフはペテルブルク中心から南西約4キロメートル、ネヴァ川がフォンタンカ川やオブヴォド運河と合流しながらフィンランド湾へ注ぐ場所に位置する。18世紀初頭、ロシアがこの近くの海上でスエーデン船二隻を捕囚して勝利した事件（1703年5月18日）を記念して、ピョートルが二番目の妻エカテリーナに宮殿建設用に土地を与えたとの史実に由来して、その地名Ekateringof（エカテリーナの館）が誕生し、木造二階建ての宮殿、湾へ通じる小さな運河と整形庭園が作られた【図1、2】。その後、ここは宮殿東側の草原・茂みと森の部分も加わって全体が20世紀初頭まで、初春5月1日や聖神降臨祭に多くのペテルブルク住民が市内から集まる祝祭とパークの場として知られ、革命後も住民に娯楽と憩いを与える場所として機能した。遡って18世紀には、その時々々の権力者の意向に左右されて盛衰を繰り返し、19世紀初頭には荒れるにまかされていた（下で引用するプーシキン作と考えられる4行詩の第1行目の「僻地」という言葉に注目）。復興すべしとの声が高まったのは、1810年代後半から1820年代初めにかけて、すなわち、ナポレオンとの戦いに勝利に沸き、遊興・娯楽への渴望が高まっていた時期である。その事業に着手したのは、かつて軍神アレクサンドル・スヴォーロフ（1729-1800）の最側近にあった名将で、当時、ペテルブルク軍総督・県知事の職に就いていたミハイル・アンドレヴィチ・ミロラドヴィチ（1771-1825）である。彼は「エカテリンゴフ建設委員会」を組織し、フランス人建築家オギュスト・モンフェランに全体計画を依頼し、エカテリンゴフ復活を主導した。再建工事は1823年6月に開始し、急ピッチで進められ、1824年5月に一応の完成を見た【図3、4】。本稿で検討するフヴォストフの詩はこの再生成った祝祭を謳ったものである。ミロラドヴィチは、祭りの半年後、1824年11月にペテルブルクを襲った大洪水の中、首都の最高責任者として奔走し、さらに、1825年12月14日のデカブリスト反乱では元老院（セナート）広場で体制側鎮圧軍の先頭に立ち、反乱軍の刃を受け、翌日死去した⁶⁾。

I-3

詩人アレクサンドル・プーシキンは1834年5月3日付日記に次の4行詩を書きつけている。

かつてフヴォストフが讃美した僻地よ！
きみはロシアの自然の貧しさと
ピョートルの専制と
そしてミロラドヴィチの愚かさを高らかに宣言する⁷⁾

「エカテリンゴフ門のへ銘」と題されたこの詩の作者は不明で、これが当時、巷に流布していた戯れ歌であったとの指摘⁸⁾も捨てがたいが、プーシキンと詩人フヴォストフの関係性から見て、プーシキンである可能性はきわめて高い⁹⁾。この点に関しては、以下でも論及するが、ここで注目したいのは一行目である。この“讃美”が、1824年にフヴォストフが発表したある頌詩を意味し、“僻地”がエカテリンゴフを指していることは間違いない。

本稿の目的は、フヴォストフ作のこの頌詩「1824年エカテリンゴフ五月園遊」を取り上げ、詩の描写の表象性に配慮しながら、テキストに文化史的コメントリイを加えること、あわせて、当時としてはペテルブルク市外にあったエカテリンゴフで春に開催された祝祭の全体を素述することにある。さらに、詩が頌詩という枠組みから逸脱して習俗記述的な面を持つテキストであることを確認したい。

I-4

この詩の作者について簡単に述べておく¹⁰⁾。ドミトリイ・イヴァノヴィチ・フヴォストフは1757年7月19日（旧暦）、ペテルブルクで、父は親衛隊陸軍少尉、文学者カリン兄弟の姉妹である母の家庭に生まれた。両親とも当時の高い文化的教養を備えた人物であり、А.П.スマローコフやД.И.フォンヴィーゼン、В.

⁶⁾ ミロラドヴィチに関してはБонларенко（2008）、Глушин（2004）。

⁷⁾ Пушкин А.С. Полное собрание сочинений в 16 томах. М.-Л. 1937-1959. Т. 12, стр. 328. 「僻地」と訳した原語дыраの本来の意味（「穴」「門」）、エカテリンゴフを「僻地」と名付けた意図、タイトルの「エカテリンゴフ門への銘」をいかに理解すべきか、このごく短なテキストをもとに論じられるべき問題は数多い。この4行詩も含めて、プーシキンの同日の日記には日本語訳がある（『プーシキン全集 6 回想・日記・書簡』河出書房新社、p.97-98、訳注p.554）。ちなみに、「僻地」は「片田舎」が、訳文は本稿筆者のもの。

⁸⁾ Балакин（2011）。

⁹⁾ Кулагин（1996）。二人の関係についてただちに想起されるのは、プーシキン作の叙事詩『青銅の騎士』におけるフヴォストフの言及、プーシキンの文章「フヴォストフ伯爵へのオード」（1825）である。二人の関わりについては『プーシキン百科事典 1799-1999』（Пушкинская энциклопедия. 1799-1999. М. Стр.592-593）が詳しい。二人の詩人が世代のみならず詩に対するスタンスと感性の上で基本的に対立することは間違いないとしても、時代的・個別的にはよりよい検証が必要である。プーシキンの立ち位置を無限定に是とする立場からは、二人の関係だけでなく、18世紀末から19世紀前半にかけてのロシア文学・文化の問題群が見えてこないのではないか。その意味からすれば、例えば、プーシキンの上記文章の後者について論じたトゥィニャノフの仕事（Тынянов, 1922; 1929）は、オードならびにパロディについての再考を通じて、同時期のロシア文化の全体像をとらえ直す大きな契機となる。以下の注45も参照。

¹⁰⁾ 最近、フヴォストフ論としてはおそらく最新かつ最良の成果としてИ.Ю.Виницкий『サルデーニャの伯爵 ドミトリイ・フヴォストフとロシア文化』が刊行された（Виницкий, 2017）。周到な文献調査と軽妙な文体の点で他に例を見ない労作である。この他に、フヴォストフについてはХвостов（1997; 13-15）、Западов（1938）、Морозов（1892）、Корнеев（1990）を参照した。

И.マイコフらの作家や詩人が家を訪れる文学的環境下にあった。彼は、フヴォストス家が13世紀に起源を持つ高い家柄であることに加えて、家庭教育、リトケ教授の個人パンシオンならびにモスクワ大学で学び、早くから才能が認められていた。短期間の軍務(1772-1779)に就いた後、行政面で活躍をした。1799年にはサルデーニャ伯爵の称号ならびに聖アンナ級勲章を賜り、元老院議長(1797)、宗務院宗務総監(1797-1803)、元老院局長(1799)、三等文官(1800)、元老院議員(1807)、国家評議会議員(1818)、二等文官(1831)として務めた他、関係が良好でなかった皇帝パーヴェルと軍神スヴォーロフ(彼の姪が詩人の妻)の仲介役ともなった。1791年から帝室ロシア科学アカデミー正会員としてアカデミー・ロシア語辞書の編纂にも参加、同アカデミー名誉会員(1817)となった。

彼は早くから文学・戯曲の分野で精力的に仕事に残している。1777年には宮廷劇場でエカテリーナ大帝臨席下に自作の詩喜劇『信じやすい人』が上演された他、1780-90年代にはいくつもの喜劇・オペラが創作された。翻訳としてラシーヌ『アンドロマック』(1794)、ボアローの『詩学』(1808-1830、5版)が大きな仕事として残る。ロシア文学史の上では、古典主義後期に属する詩人として早くから活躍し、当時の詩のほとんどすべての分野(頌詩、書簡詩、諷刺詩、寓意詩、寸鉄詩、挽歌詩、恋愛抒情詩、墓碑銘詩等々)にわたる多数の詩を残し、1802年に官職を退いてからは文学活動に専念し、1811年から自らも組織者の一人としてペテルブルクの文学協会《ロシア語愛好者談話会》(1811-1816)を中心に活動した。全詩集が生前に何度も、その度ごとに増補・改訂されて刊行されているが(1817、1821、1828、1835)、晩年、編纂に着手した「ロシア作家事典」は完成されなかった。

強調すべき文学史上の事実、彼の作品ならびに彼の人となり、18世紀末から19世紀初頭・前半にかけて、H.M.カラムジンが創設した《アルザマス会》やプーシキンをはじめとする多くの若き文学者世代によって盛んに取り上げられた、より具体的に言えば、彼は旧世代詩人の代表者としてパロディの対象となり、好んで嘲笑的とされた人物となったことである¹¹⁾。1835年10月22日にペテルブルクで亡くなり、「クブラ川の詩人」と自称したとおり、家代々の領地(ベレス

ラヴリ=ヤロスラヴリ近くのヴィボルゾヴァヤ・スロヴォダ)を流れるクブラ川のほとりに埋葬された。

II-1

頌詩「1824年エカテリニングフ五月園遊」は全体で431行(1829年版では427行)からなる長詩である。初版の表紙は以下の通り(正書法により現代表記に改めた)。

МАЙСКОЕ ГУЛЯНЬЕ
В
ЕКАТЕРИНГОФЕ
1824 года
СОЧИНЕНИЕ
ГРАФА ХВОСТОВА
САНКТПЕТЕРБУРГ.
В Типографии Н.Греча.
1824

(訳 1824年エカテリニングフ五月園遊 フヴォストフ伯爵作 サンクトペテルブルク N.グレーチ印刷所 1824年)

裏表紙(2ページ)には「1824年5月22日 印刷許可」とあり、その下部に「検閲官アレクサンドル・ビルツコフ」とある。本文は3-18ページ、19-20ページに計25項目の注が付される。発行部数は不明だが、初版は書籍商И.В.スリョーニンの資金で別刷りされたとされ、興味深いことに、この小冊子はエカテリニングフの祝祭に参加する人々に配られていたという証言がある¹²⁾。こうした記述の背後には、当時の文学作品が社会へ流布するルート的一端が読み取れるのである¹³⁾。

この作品は1824年後も、彼の全集・詩集に必ずと言ってよいほど収録されているが、パンクチュエーション、大文字小文字、行替えのみならず、細部の表現・表記の上で改訂した箇所がある。本稿では、適宜その異同にも触れるが、テキストの読解に問題となるような大きな改変はほとんど見られなかった¹⁴⁾、全体として1824年刊行の初版を検討する。また、1829年版の注には、この詩が1824年の作であることに加えて、ミロラドヴィチの希望により創作されたことが記されている¹⁵⁾。

¹¹⁾ 上記の注9を参照。特に、プーシキンによるオード論(1825)とそれに対するトィニャノフの秀逸な論考(1922)は、従来のフヴォストフ評価(「才能のない詩人という悲しい名誉を得た」)を問い直す手がかりとなるはずである。その意味からすれば、スヴォーロフは死の床で詩人に向かって「これ以上、詩作をせぬように」と言ったという伝説、あるいは、フヴォストフ編『ロシア詩の最良作者の撰集』(1802年)についてИ.А.ヴァゼムスキーが「この本は、われらアルザマス会では、必ず机上に置かれる慰め本だった。ジュコフスキーはつねに、それを手にして、しばしばそこからアルザマスの靈感をくみ取っていた」とする文章(Корнилова, 348-349)、さらに、上で引用したプーシキンの日記中の詩もこの文脈で理解されるかもしれない。

¹²⁾ Кулагин (1996)。ただし、5月22日に検閲許可を受けたことの説明が必要である。

¹³⁾ このエピソードは、フヴォストフの自己顕示欲の強さという個人的キャラクター、そして、若き文学者からの非難故に出版者が刊行を望まなかったという事情を物語るだけではない。文学作品が編集者・出版人や本屋を仲介することなく、ダイレクトに「読者」に届けるという点で、当時の出版文化・メディアのあり様を示す点で貴重である。ただし、詩人自身は、自らの領地に向かう街道沿いの駅亭には必ず自分の詩集を置かせた、以下であげる女性歌手のオペラ公演の際、自身の訳本を来場者のために用意したといったエピソードには事欠かない。

¹⁴⁾ 本稿著者が比較・参照したのは1827年、1829年版の二つである。

II-2

冒頭、春の宴に参加する詩人の高揚感が歌われる。

喜びの源は皐月
私はきみの宴の参加者
豎琴はきみへの賛美を爪弾き
きみの美しい日を歌いあげる（1-4 以下、数字は本文の行数を示す）

「宴」пирと「豎琴」лир、「皐月」цветеньと「日」деньは韻を踏む。皐月と訳したцветеньは、ダーリ辞典によれば四月とも五月ともされるが¹⁶⁾、詩人はわざわざ五月の古名との注を付けている。1824年のエカテリンゴフ園遊が5月1日から7日にかけて行われたこと、そして以前からこの場所では5月初頭と聖神降臨祭に祭りが行われていたことは当時の定期刊行物の記事に明らかである¹⁷⁾。

続く4行で「詩神の呪文に気付いた冬」が「厳寒と雪の屋敷とともに、はるか丘の谷間へ足早に飛び去る」とされた後、春到来の描写が続く。

おお五月！ それは春の王国！！
古代ラダ神の寵愛を受けた愛しい友！
きみのおかげで再び喜びに息づき
足元には花がもたらされる
春！ それはすべての自然の宴！
春！ 輪舞が訪れ
春！ 水がざわめきはじめる
春の朝 小鳥たちは
歓喜をこめて歌う
曙神への歌
海へ舞い降りる詩神が水面に黄金の光を注ぐさまを（9-19）

ラダ神は「古代」という形容がなされるにもかかわらず、ロシア神格をめぐる18世紀半ば以降の記述史に初めて登場する「新しい」神であり、春を象徴する存在として広く流布し、人気を博していたことがこの詩行でも明らかである¹⁸⁾。

詩全体のテーマの一つであるグリャーニエ（園遊・遊歩）という言葉が最初に登場するのは、この詩のタイトルを除く本文21行目である。ちなみに、フヴォス

トフが同時期のペテルブルク郊外での「園遊」を歌った作品としては、1826年作「イェラーギン島とカーメンヌイ島 1826年7月1日の園遊」がある¹⁹⁾。グリャーニエは、当時、エカテリンゴフだけでなく市内・郊外のさまざまな場所で見られた。そして、18世紀初頭に始まるペテルブルクのグリャーニエ史全体から見れば、1820-40年代は一つの頂点と言える時期にあっていた²⁰⁾。

やさしく有翼のゼフィロスたちは
名高き園遊の日に
白いライラックを揺らしながら
空中に芳香を振りまく（20-23）

24行目から続く8行では、帝都ペテルブルクが高らかに称えられる。ペテルブルクを意味するペトロポリは詩人の守護神たるミューズが住まう場所とされる。

栄誉ある名高きペトロポリは
ツァーリの川の波で洗われ！
広く交叉する路が多くあり
川の寢床は大理石
目に露わな偉業のトロフィ
美しき聖堂と建物
そこは 平和と雅趣が支配するところ
ネヴァ川岸のミューズの村のある所（24-31）

詩人は25行目に「作者は自身の多くの作品でネヴァ川をツァーリの川と名付けている」と注記している。ミューズの村、平和と雅趣といった言葉からは安寧な都の様子が浮かぶ。

この帝都に静寂が訪れる。

だが 世界第一のこの玉座の町は
五月の一日には ひとけがない
ちょうど刈入れ時の村のように
馬上の人も御者も姿を消し
馬車の音も聞こえない
すべてが静まり 大通りは眠ったかのよう（32-37）

しかし、都のシンボルたるネヴァ川には舟があふれ、感嘆のまなざしを誘う。

人々は船着場へ殺到する

¹⁵⁾ Хвостов (1829: 252).

¹⁶⁾ Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. Изд. 3-е. СПб. Т.4, 1251.

¹⁷⁾ 例えば Федоров (1824)。

¹⁸⁾ 初出は不明であり、詳しくは18世紀末-19世紀初頭の神話学史を点検する必要がある。詳細な記述で有用なЛ.М.ヴァグリナ編の『スラヴ神話学』（Славянская мифология. Словарь-справочник. М., 2004）では、立項こそされているが、記述は具体性に乏しい。スラヴ・バルカン学研究所が編纂した『スラヴ古代文化 全5巻』（Славянские древности в 5 томах）には項目すらない。

¹⁹⁾ 新皇后アレクサンドラに捧げられた頌詩であり、フランス語、ドイツ語訳が添えられている。ただし、全体で40行の分量と内容は「エカテリンゴフ」にはるかに及ばない。

²⁰⁾ Конечный (1985).

小型ボートや小舟へ急ぐ
帆船で行く者
男の子二人を
ランチに坐らせる者
水上を行くのを怖がり
岸边から目を離そうとしない者もいる (47-53)

水路を利用して「ラダ神の光明の祭りへ急ぐ」人々
はどこへ向かうのか。

すべての年齢の人々が すべての土地から
ただ一つの目的地である歓喜の場を目ざす (58-59)
・・・(中略)・・・
皆が向かうのはエカテリノフ
風が静かに吹くならば (63-64)

冒頭で、五月は春！の宣告があったにもかかわらず、冷たい風や雨のある気候不順の季節である。現存する公式データによれば、1824年5月1日の天候は、朝曇り、時に雪、+1.2℃、昼曇り、雪、+3.5℃、夜曇り、+2.2℃であり、五月初めの雪はペテルブルクでは珍しくなかった²¹⁾。

強風だけでなく、川の波も高いが、そのうねりをもろともせず、堂々と進む船がある。それは、詩行では山にも、火の神にもなぞらえられる蒸気船である。

ペトロポリに喜びを与え
水面を突き進むのは
ベルド製の有用な蒸気船
燃え盛る火の建物
御婦人とわれらがヒーローは
そこに乗り込み 園遊へ向かう
今は 甲板から美しい光景を愛でる (77-83)

ベルドの蒸気船はスコットランドのチャールズ・ベルド工場の製作で、1815年から1825年まで11艘が作られた²²⁾。荒波を切ってさっそうと航行する姿は祝祭の開催に花を添え、大きな話題となったはずである。

エカテリノフへ向う経路は、むろん水上だけではない。陸路に目を向けると、「そこに厚い黒雲が舞う」(88)。馬車の群れに加えて多数の庶民が徒歩で向かう。そのことは、別稿で検討するガンペリンの版画

【図5】からも明らかである²³⁾。その馬車と人々の行列が10露里（1露里は約1km）にも及んだことは、ゴーゴリも記している²⁴⁾。フヴォストフはその後の詩行で多種の馬車の名称をあげる（коляски, четверка, кареты, дрожки）²⁵⁾。そして、この突進する馬車同士が衝突し、転倒する様子までもが描かれているが、これもガンペリンの版画にはっきりと見てとれる。

石にぶつかる音が次々に聞こえてくる
車輪と馬のいななきの音が
人々の集まりの慌ただしさの中で
哀れなのは いきなり転倒し
勢いのあまり車輪がころがり
あるいは 車輪の軸が折れて散らばり
重さに押しつぶされて粉々になるさま (103-109)

路上行進の混乱ぶりに対処すべく、「警備兵が祭りに目を光らせる」(110)。

それでも 多くの人々は取り乱し あたふたする
金持ちも貧乏人も道を急ぎ
星占い師は無学な者に負けまいと
誰もが人より先に行きたがり
秩序も何もありはしない (111-115)

馬車や人が祝祭へ殺到するさまを描くこうした詩行は頌詩には似つかわしくないと見えるが、きわめてリアルな描写には驚かざるをえない。庶民にとってごく当たり前の日常生活と習俗を観察し、それを周倒に記述していこうとする動きが芽生えていたこの時期（『散文の時代』）の、例えばブルガーリンの文章（ルポルタージュ）に通底するまなざしがここにはある²⁶⁾。

市内から陸路でエカテリノフ園遊へ向かうには、フォンタンカ川にかかるカリンキン橋袂に始まるペテルゴフ街道を南下し、オブヴォド運河を渡らなければならない。19世紀初頭・前半には、このオブヴォド運河が市内と市外を分ける境界線となっていたことから、ここに門が関所として作られていた。当初、フォンタンカ川とペテルゴフ街道の交差点に作られたのが、エカテリーナ二世の戦勝記念として1784年にA.リナルディによって建立された凱旋門である。それを引

²¹⁾ Ходанович (2013). 本稿冒頭であげたプーシキンの日記にも「1834年5月1日のエカテリノフの園遊は悪天候のため盛況ではなかったが、行われた」とある。

²²⁾ Ходанович (2013).

²³⁾ 坂内 (2017)。

²⁴⁾ 注1を参照。

²⁵⁾ ホダノヴィチは、1824年ペテルブルク市内の印刷物からколяски, кареты, кабриолеты, дрожги, брички, ландо, дормезеを拾い上げている（Ходанович, 2011: 64）。

²⁶⁾ Булгарин (1825)。

き継ぐ形で、ナポレオンとの戦いに勝利を記念したナルヴァ凱旋門が、先の門よりも少し南に移す形で計画され、1814年に完成した（木造、ジャコモ・クヴァレンギの設計）²⁷⁾。当然ながら、エカテリンゴフの園遊の参加者、特に陸上から向かう人々と馬車の大行列はこのナルヴァ門をくぐることとなるが、また、この門をくぐらず、運河沿いに進んでペテルゴフ旧道から入るルート、さらに、ペテルゴフ街道を少し行ってから斜め右へ進み、エカテリンゴフ通りに入るルートもあった。

血で獲得された労苦に報いるべく
ツァーリの親衛隊たちのために
愛によって建造された門は
詩神の夜明けから深夜まで
開いたままにしておくように
エカテリンゴフの茂みへ導くために（116-121）

116-118行は凱旋門の由来を物語っている。門が関所であることからすれば、祭りの時期は特別に、市内市外から来る者たちは無礼講でいつでも入場できたのだろうか。

II-3

凱旋門をくぐると、いよいよそこは祭りの世界が姿を現す。ただし、祭りの舞台が広がる茂みに入る前には、タラカノフカ川とそれに架かるストウギン橋を渡らなければならないが、その描写はない。

先導者が馬の首を 南から西へ
穏やかに向けるやいなや
皆の願いは成就し
町は園遊へ突入した（122-125）

「南」と訳したロシア語полденьは詩語で、通常は「真昼、昼間」を意味する言葉である²⁸⁾。ここでは、祭り参加者の行列が、それまで市内中心から見て南下していたペテルゴフ街道を右折する（イコール西に向かう）ことを表現している。また、前述のごとく、門が市内と市外を分ける関所に建てられていたことから、祭りが市の外・町はずれで開かれていたことは明らかである。エメリヤノフカは、エカテリンゴフ南の市外地に広がる村の名前だが、それがまるで古称のように響く。

エメリヤノフカ村には楽しみが
そこは新たな喜び
すべてが新たな住まいに満ちあふれ
古い家はもはやない
新宅はどれも多様で 美しい
自然の魅力を備え
有り余る趣きが 調和良く絡まりあう
豪華なツァーリの手によって（148-154）

ここには、帝都拡大とともに、郊外にあった昔からの農村の開拓が始まり、そこに新たな建物が建てられつつあることの証左がある。詩人は注で「優雅な趣味の持ち主であるアレクサンドル1世は建築にずば抜けた知識を持っており、エメリヤノフカの住宅建設に公費を支出した」と記している²⁹⁾。さらに、この詩行に続けて、

春から秋までは広々とした自由の場所
そこにはバラの香りと善なる意志がある（155-157）

詩人が皇帝とともに最大の敬意を払っていたのが“アルプス越え”で知られた軍神スヴォーロフである。そのことが「善なる意志」благовольеに示されている。この言葉は前行の「広がりある世界」раздольеと韻を踏むだけでなく、さらにスヴォーロフその人の言葉だった（詩人の註によれば、「勝手気まま」своевольеに対立するものとして将軍が使用していた）。フヴォストフの妻がスヴォーロフの姪だったこともあり、陸軍中佐であった詩人はスヴォーロフの個人秘書としての勤務を経験したから³⁰⁾、この軍神の言葉と考え方がそのままフヴォストフの詩に反映されたと考えるのはごく自然である。

158行からは、祝祭の場に集まった多くの人々の様子が語られる。

はるか遠方より来た大勢の異民族の人々が目に入る！
音色が次第に大きく流れわたり
絶え間なく音が聞こえてくる
樅の木を囲んで大勢の人々の声があり
フィン人 ギリシャ人 タタール人がいて
煙突もサモワールも湯気を立てる
詩人 作家 編集者は
土ほこりを飲み込み 口笛を耳にする
角笛と敏捷な口笛の音を

²⁷⁾ クヴァレンギは1779年からペテルブルクに住み、1817年に死去したイタリア人建築家。1824年6月、アレクサンドル一世はミロラドヴィチに対して老朽化した木造のクヴァレンギ門を石か銅製にするように命じている。それを受けて、より大きな、大理石と金属で覆われたものが完成した（建築家B.П.スタソフ）のは1834年秋で、クヴァレンギ門より南に位置した。現在のナルヴァ門はさらに南の場所に建っている。

²⁸⁾ 祭りの場への進入が昼間であり、陽が傾く夕刻にかけて祭りが盛り上がるのを暗示すると読めるかもしれない

²⁹⁾ ただし、皇帝アレクサンドル一世死後刊行の版（1827年以降）の注であり、当然ながら1824年版にはない。

³⁰⁾ 250通以上にのぼるスヴォーロフとの書簡のやりとりがあり、『スヴォーロフ書簡集』（Суворов А.В. Письма. М., 1986）にはフヴォストフ宛で90通が収録されている。また、クリュコフ運河通りにあった詩人の家には、スヴォーロフの妹、娘と息子、最晩年のスヴォーロフも住み、彼はここで1800年5月6日に最期を迎えた（Греч, 1886: 105）。

そこには 何百頭ものおとなしい雌羊
熊は狐よりも多く
そして 多くのさまざまな人たちがいる (158-169)

雌羊、狐や熊が登場するのは、これが仮装した大道芸人によるのか、それとも本物の動物だろうか。

園遊の主な舞台である茂みにハレの祭りを楽しむ自由な人々がいて、村人はいかにも流行外れの服装をしながらも、それぞれが思い思いの遊びの時間に耽って打ち興じている。その衣服の具体が記載され (шубейка, лента, сарафан, кафтан)、また、そこはさまざまな音楽の音にあふれている一軍楽隊の音楽、ロマンスやバラード、チロルの歌手たちの歌と踊り、そして「素朴な歌謡」や「仲良く歌われる陽気な歌」も鳴り響き、それを歌うのは「勇敢なる者たち」(口承文学の常套表現)である。

巧みで 生き生きと かっこよく 流れるかのよう
オギュストとコロソヴァに栄誉あれ
ただただ称賛あるのみ (187-189)

オギュストは1780年頃に生まれたフランス人 (パーヴェル帝お気に入りの女優ルイズ・シュヴァリエの弟) で、1789年に帝室バレエ団でデビューし、パリオペラ座でも公演した。多くの役を踊り、名声を得たが、1826年を最後に舞台から去り、1844年にペテルブルクで死去したバレエ・ダンサーである。フランスの哲学者でバレエ理論家としても知られるデニス・ディドロ、ならびに、ロンドン、パリ、そしてロシアでもバレエ教育に大きな貢献をしたシャルル・ディドロとも交流があった。一方、コロソヴァは、詩人の注に「ペテルブルク劇場の著名な踊り手」とあることから、1782年生まれのエヴゲニヤ・コロソヴァを指すのだろう。ただし、娘のアレクサンドラ (1802-1880) が俳優だったことから、母と娘ともフヴォストフとの関わりは深い。1820年9月16日、ペテルブルクで披露され、評判となったラシーヌ作の劇「アンドロマック」でエルミオニス役をつとめたのがアレクサンドラだった³¹⁾。

音と動きに満ちあふれた園遊の雑沓の中を詩人はさまよう。そこで出会うのは「著名な職人ビュルツマン」(ただし、架空の人物との注記がある)、娘と婚約者、教父と教母、蜜湯売り等である。こうした喧騒の中で、詩人はただ一人、夜の闇に沈むかのように目を凝らし、バルト海の波のうなりや川の音、木々のざわめきに耳を傾けるが、何も見えず、聞こえない。あたりに広がる陽気さと喜びにもかかわらず、ここでは詩人はただ涙を流し、うめき、嘆くだけである。

不幸なる者よ! 愛する人と別れ
長いこと別れ別れになり 何も言葉はない!
連れあう者はない! 大地はからっぽで
風景の美は消えてなくなった
何ひとつ目も耳も慰めるものがなく
彼は生氣もなく 魂の陰鬱を味わうが
きみの掟を神々しく敬う・・・春よ!
生命を喚起する春は
ここ ピョートルの隠れ家で
壮麗で新しい庭で
心の病を断ち切らせる
巧妙で心のまま しなやかに
受難者は取り戻す幸せへ向かう
ありのままの 罪なき微笑みでもって (223-236)

祝祭の只中にあるにもかかわらず、孤独の底に沈潜したかのような詩人は、春を再度体感して微笑み、目前の現実世界に戻る。

わがまなこは開かれ
夜空に天体は輝き
耳と心に聞こえるのは
バルト海の波のざわめきと波音 (249-252)

この地は、ひとたび岸辺に出れば、フィンランド湾からさらにバルト海を臨むことができる。ここはかつてピョートル大帝が、スエーデンとの戦いにあたり、敵軍侵入を見張るべく「監視塔」を建てた場所である。バルト海のうねりの激音が、半年後の11月8日に発生した大洪水と、さらに一年後の12月14日のデカブリスト反乱の予兆とするのは深読みだろうか。

II-4

253行目から歌われるのは、詩神ミューズたる作者の思いである。

私は強い歓喜をおぼえる
ミューズが私に降り立ち
自ら豎琴を弾き始めたかのよう
彼女の火は私の心を燃やし
燃え上がるまなこは輝き
指が弦を走る
彼女の言葉がまさしく聞えてくる
ツァーリに栄光あれ! 彼女は予言する
偉大なる祖先と先駆者たちの名誉を蘇らせることを
(253-262)

孤独と歓喜の中、ミューズによってもたらされた霊

³¹⁾ 上演はフヴォストフによる新たなロシア語訳によるもので、新訳本は初演の日に向けて刊行され、劇場入り口で売られたという (Балакин, 2011)。ちなみに、コロソヴァ母子はプーシキン家との関わりが深く、プーシキンも母子の家をたびたび訪問していた。

感で背中を押されるかのように詩人はエカテリンゴフ園遊賛歌を歌い始める。まず語られるのはエカテリンゴフ誕生の物語である。

この地でピョートルは雷を振るう手でもって
伴侶のため 自らの榮譽のために
遊びと慰みの館を建てた
エリザヴェータとアンナのためにも (270-273)

ピョートルの第二の妻のためにこの場所が用意されたことはすでに述べた。かつてこの敷地の南には、ピョートル大帝の二人の娘アンナとエリザヴェータのためにアンネンゴフとエリザヴェトゴフの名前の屋敷が建てられたこと（質素な木造一階建として宮殿が計画されたが完成せず、現存しない）がここに明確に歌われている。続いて、エカテリンゴフがロシアの会戦として最初の勝利という記念すべき場所であることが改めて確認される。

ここはロシアびとにとっては忘れ得がたき場所
ピョートルの労苦で聖なるものとなった所！
彼は ペレスラヴリの水に始まり
はじめてベリシュに突進した
海上で最初の実りを手にし
この地で勝利の味に酔いしれた (274-279)

276行目は、1692年のクレシチン湖・ペレスラヴリ＝ザレスキイにおけるロシア初の艦隊航行を、続く行のベリシュはメクレンブルクを示唆する。

280行目から描かれるのは、川岸から小運河で少し入った場所に立つエカテリーナ宮殿の様子である。宮殿（ドメニコ・トレザーニの建設プランによるとされ³²⁾、1924年まで存在した。ピョートル宮殿と記されることも多い【図8】）は木造二階建てとして1711年に完成したが、21部屋からなり、春夏に公開されていた。一階にはピョートル期の家具・生活用具が、二階は後世の宮殿内の装飾品や中国風カビネットがあった³³⁾。詩人が実際に目にしたと考えられる、ポルタヴァ戦でピョートル自らが着用した軍服、ピョートルがバルスコヴァに贈った手製タバコケース、エカテリーナのソファ等言及された後、ピョートルの仕業が讃美される。オード詩人としての面目躍如たる場面だが、18世紀のトレヂャコフスキやロモノソフに始まるロシア頌詩の歴史から見れば、さほど新しい魅力がある個所とは言えない。

ピョートルを思い出すことは心地よい
陸地も海も 音のリラも
善行を高々に予言する

アルキド・ヘラクレスの手がわれらに与えたものは
ペトロポリ 手業 学問
文官の位 軍の体制
われらが建設者ピョートル われらが英雄たるツァーリよ！ (290-296)

続いて、エカテリンゴフのパーク内の各種建物が歌われる。いずれも、1823～24年にかけてモンフェランの設計計画に従って作られた施設である。冒頭にも記したとおり、オギュスト・モンフェランは、ミロラドヴィチの要請を受けてエカテリンゴフ再生に中心的役割を果たした人物である³⁴⁾。

川岸に高く聳える八角形パビリオン（高さ22m、正面ファサード12m）はゴシック式尖塔で、入口横に置かれた二頭の大きな铸铁製ライオンの像とともに目を引く【図9】。国営铸铁工場で作られたペアのライオン像は、その後、造兵廠川岸通りの邸宅前に移され、今はベトロドヴォレツの管理下にある。パビリオンは1860年代末に取り壊され、現存しない。

雨嵐に激怒した川
栄えあるネヴァの岸辺で
横たわるライオンは尾を逆立て
パビリオンのわきで旗を守る (296-300)

川岸沿いに下ると、そこには、ファームと名づけられた農家が聳える農場が広がる【図10、11】。

黄金の時代を思い起こさせるのは
村近くの農業の館
そこには 村風の素朴なしつらえがあり
川辺に 肥えた家畜が群れ
われらに食料と豊かさを予告する (317-321)

詩人の註に「ファームないしは牛小屋」とあるとおり、アルカディア風の豊かな農村の光景が描かれる。この周辺は放牧地として機能していた。

羊の豊かな毛は
柔らかな織物をもたらす
さまざまな国からきて 首都近くに
名だたる子牛が放牧され
その乳牛とチーズが
祝祭の宴へ披露された (322-307)

このファームとされた建物（13×36m、高さ22m）は農業施設であったと同時に、ミロラドヴィチの夏の住居となっていた。内部は大ホールも含めていくつものパートからなり、その一つは書庫にあてられていた。

³²⁾ Дубяго (1963 : 105).

³³⁾ Ходанович (2013).

³⁴⁾ モンフェランに関してはЧеканова и др. (1990)、Щуйский (2005) を参照。

啓蒙を愛する者たちは
孤独の森に 見つけ出すだろう
賢人と歌人の語らいの中に
快い数時間を
書庫の中に入りさえすれば
彼はロモノソフに出会い
ヘムニツェル ボグダノヴィチがそこにいる
クニャジニン オゼロフも (328-335)

書庫は高さ9ないし22m、幅13×36m、ロシア語や外国語の図書や新刊雑誌が収蔵されていた。いずれの名前も18-19世紀初頭までのロシアの作家だが、337行目に「われらを罵倒を浴びせたヘラスコフ」とあるのは、ヘラスコフとフヴォストフ（ならびに彼のグループ）との関係を反映したものとなれば興味深い。先人文学者たちをただ称賛する訳ではなかった。そして、さらに続く詩行は立ち止まるに値する。

私は嬉しい タベに涼気の中で
夜ウグイスが鳴くのを耳にできるならば (342-343)

この園遊の時期に夜ウグイスの囀りはかろうじて聞えるかもしれない。だが、問題となるのは、詩人が「宿敵」プーシキンのことを「タヴリーダ宮殿庭の夜ウグイス」と呼んでいることである（1832年8月2日のプーシキン宛ての手紙に添えた詩の中で）。エカテリンゴフ頌詩が書かれた翌年、プーシキンは有名な「フヴォストフ伯爵へのオード」を発表したことから見れば、この時期のプーシキンとの関係は、少なくともプーシキン・サイドからは良好ではなかったと考えられる。しかし、もしも上記の引用部分で、夜ウグイスがプーシキンを示唆すると仮定するならば、フヴォストフの立ち位置は、むしろ、世代ならびに詩に対する基本的立場の点で対立的であったとしても、これまでのステレオタイプ化した見方とは異なる面を見せるかもしれない。

ファームは1882年に焼失した。

モンフェランは、エカテリンゴフの祝祭を再構築する上でライオン・パピリオンと同じゴシック式の建築物を忘れなかった。建築家はパリのシャンゼリゼ通りにある同種の建物をモデルとして計画し、それに「居酒屋」の名前を与えようとしたが、最終的にはヴォグザルと呼ばれた【図12】。もともと、ロンドン近郊のヴォクスホール・ガーデンズを意味するVauxhallに起源を持つ名称を冠したこの種の建物は、イギリスの「庭園・社交娯楽場」にならってロシア各地に同様の施設が建設された（1793年にナリィシュキン庭園に作られたのが最初という³⁵⁾）。このヴォグザルという言

葉は、後には鉄道駅の意味に転用されるが、未だ鉄道が開通していない1820年代ロシアでは社交場の意味しかないのは当然である。エカテリンゴフのそれは、巨大なロトンダを備えた舞踏会場として使用されたほか、ビリヤードや遊戯が楽しめる場所、室内庭園、カフェ、レストラン、食堂、台所等を備えていた³⁶⁾。また、フヴォストフの肖像画をロトンダに「永久に」掲げておくように、とミロラドヴィチが指示していたというのが、実際に掲げられたのか、いつまであったかは不明である。

ゴシック建築の

巨大な砦が聳えている

ネヴァ沿いでヴォクザルと呼ばれている

そこは 活発なアムールたちが

美の三女神の舞踏会を準備している

巧みなバイオリンの楽弓にあわせて

ほうびと ていねいな微笑みと

そして優しきカリテスの眼差しを求める (344-352)

ヴォクザルは1870年代に焼失している。

さらに森の奥へ進むと出会うのは

豊かな農民の小屋 (353-354)

エカテリンゴフの茂みと林の間には、食事やカフェのための農民小屋風の建物がいくつか作られていた。庶民が利用できる屋台風のものもあったが、小さな小屋では、両開き窓にガラスがはめられ、内部にはテーブルと板張りベンチ、花綾模様の素朴なナプキンが置かれたものもあった。プーシキンが食事をしたのもそうしたレストラン小屋の一つであった【図13】。

ここはまるで村へ立ち寄ったかのよう

庶民の栄えある安らぎの場とランチがあり

ロシア風の十分なもてなしがある

「レモネードはいらないか」の声

ディナー後の慰めには

プリアニク〔ロシア風糖蜜菓子-引用者〕かナッツがあればいい (353-366)

ここは、村のロシア風もてなし (363) と憩いが体感できる場である。

円内の散策中、いきなり視線を驚かせるのは「小さな柵」(367-368)である。そこは、子供たちが走り回り、自分たちの楽しみの儀式で遊ぶ「小さく、可愛らしい庭」(371)である。その近くでは馬車レースが行われるが、暴れ馬の蹄が子供に触れることなく、軽四

³⁵⁾ Пыляев (1997: 81-82).

³⁶⁾ ヴォクザルに関しては、長谷見一雄「『ヴォグザール』の音楽会」(ロシア手帳、第39号、1994)が参考になる。ミロラドヴィチはこのカフェ・レストランに、当時、『知恵の悲しみ』の上演を準備中だったA.C.グリボエドフをディナーに招待している。

輪馬車が転倒しないように、子供たちを守り、かつ楽しませるべく工夫がされている。ルソーが見たならば、大いに気に入るだろう、とまで歌われている(-380)。

ただし、子供の庭に並ぶ建物として、同時期の図に描かれたマブリタン・パビリオンは詩には登場しない【図14】。

数々の遊具や娯楽施設にも詩人の筆は及ぶ。

ブランコ ケーグリヤ〔ロシア式ポーリング〕 パノ
ラマ〔覗きからくり〕
そして 丸屋根の高い館
らせん状の吹き抜け入口
そこには滑り台と回転木馬 (383-386)

ここに列挙された各種遊具を収容した娯楽館は「ロシアの丘」と名付けられた【図15】。版画によって外見こそ想像できるとはいえ、滑り台と回転木馬が具体的にどのような形態であったかは分からない。通常、滑り台は都市祝祭の場に欠かせぬ遊戯施設として屋外に設置されていた。

宮殿前に戻ると、その入口付近には花壇が広がっている。

ジャスミンやユリの花が咲く
そこは フローラの女友だちたちが住まう
バラの原を御覧なさい
蜜蜂の獲物あり 思いにしたがい
蜂は清らかな蜜を集める
バラよ 幸せの品
人生で心地よき人は幸い
秋には芳香を
そして五月の花を手折る (391-399)

これは詩人の空想ではない。小運河両側にはオランダ式整形庭園が作られていたことは資料から明らかである³⁷⁾。さらに、海辺や池で魚釣りにも興じることがができる、という。

祝祭の庭を後にして町へ戻ろうとする詩人の目に、新しい巨大な橋が映る。

彼は町へ戻ることもできる
旋風が土ほこりを巻きあげるように
栄えある街道を飛ぶかのように
それとも モルヴォの村近くで止まるか
そこには 新たに作られた鑄鉄の柱の
アーチをえがいた立派な橋が見える (404-409)

街道は、祭りへ入場すべく通ってきたペテルゴフ街道のことだろう。ペテルゴフ街道は、ペテルブルク市内から郊外のペテルゴフ（ピョートルの館・別邸宮殿）へ、さらには遠くアムステルダム＝西洋にまで通ずる幹線道路である³⁸⁾。

橋は18世紀前半からあった木造のもの（オランダ技師ハルマン・ヴァン・ボレスの作、1739年以降）が、1823年にП.П.バーゼンとБ.П.Э.クライベロンの設計によって、長さ64m×幅10mの大きな、やはり木造の吊り橋に作りかえられた。それにともない、それまでローシシャ橋（ローシシャはエカテリンゴフの「茂み」の意味）とかピョートル橋と呼ばれていたものがモルヴォ橋と改名された【図16】。この名前は、当時この周辺の地主で、多くの郊外住宅に加えてウォッカ工場、砂糖工場を所有していた商人Я.Н.モルヴォ（1776-1826）にちなんだものである³⁹⁾。

「新たに作られた柱」とあるのは片側4本ずつの橋柱のことで、レンガと鑄鉄製だったから、当時としては画期的なものとして注目された⁴⁰⁾。同じモルヴォの名を冠する高さ6mの大理石円柱は、以前と同じタラカノフカ川のほとりに今なお聳えている。

II-5

第409行で園内巡りは終了し、締めくくりは、詩のメイン・テーマであるミロラドヴィチ賛歌である。

奇跡をめぐる芸術よ 栄えあれ
高い山から見える要塞堡壘を私は愛で
たつぷりと詩に記した
この趣きに満ちた祭典は素晴らしい (410-414)

これまでの詩行で園遊の様子を十分に書き連ねたかに感じたものの、詩人は新たな思いと想念に導かれて、頌詩のテーマを忘れることなく高々と歌いあげる—あの戦びとたるミロラドヴィチのことを。

わたしはエカテリンゴフの吟遊詩人^{パウルド}
ロシアの人々がバヤールを思いやったことを
讃美して歌うのは けっして無駄ではない
ネヴァのほとりで 彼は
新しく 従順で 輝けるトロフィによって称賛され
た
ミロラドヴィチ伯爵は 赤い太陽のもと
稲妻よりも早く駆け
アルプスの誇り高き頂点に上り
嵐雲を進んだ

³⁷⁾ Дубяго (1953 ; 1963) .

³⁸⁾ 406行目「栄えある街道」に対する注25は「凱旋門からД.Н.サルトイコフ公爵のダーチャ脇を通過する街道は、大小の石に砂が撒かれ、見事な出来ばえ」と記す。

³⁹⁾ 息子は市民市長を務めた (1816-1818)。この地域周辺から市外の工場地帯が始まり、その「伝統」がさらに南下した地域のブチロフ工場へ通じる。

⁴⁰⁾ Ходанович (2013 : 215-216) .

ムネモシユネの部屋の英雄
平和の花輪をもたらしたる者
ピョートルの榮譽を受けた彼は
この地に われわれのために楽しみの場を打ち立て
すべての人々の心を喜ばせた (417-427)

バヤールБаярдとは、16世紀に活躍したフランスの騎士ピエール・ド・テライル・バヤールのことであろう。1473年に生まれ、フランソワ一世はじめ多くのフランス王に仕え、カルル五世の大軍に包囲されたが、死守したことで知られる。頌詩詩人、吟遊詩人を意味するбардと韻を踏むが、416行目の注で詩人はミロラドヴィチについての説明を加えていることから、ミロラドヴィチを西欧のこの騎士になぞらえていることは明らかである⁴¹⁾。その注は1827、1829年版のもので、生前の1824年版にはない。以下に全文をあげる。

伯爵ミハイル・アンドレヴィチ・ミロラドヴィチ
歩兵大将、聖アンドレイ勲章 聖ゲオルギイ勲章、その他多くの騎士称号を受けた。アルプス越えではスヴォーロフの右腕となり、ブライロフを剣で攻略し、1812、1813年のヨーロッパ解放で大きな役割を果たした彼は、締めくくりとしてサンクトペテルブルク県ならびに首都の管理運営に不屈の功績を残す。しかし、軍ならびに、ツァーリと祖国に対する彼の強い愛情、献身と才能を評価するすべての人々にとって遺憾なことに、1825年12月14日、価値なき者の手によって死去し、ネフスキイ大修道院の聖霊教会に埋葬されている⁴²⁾。

その後の詩行で歌われる、アルプス越えの遠征とピョートル創建の帝都でのエカテリンゴフ復活という大事業完遂をめぐる表現は、全体として短いが、的確かつ完成度が高い。ブライロフはドナウ川左岸に位置するルーマニアの町で、18世紀からトルコの要塞が置かれて多くのロシアとの戦闘が行われ、1829年の条約以降はトルコ領となった場所である。このほか、ここではミロラドヴィチが18世紀末から19世紀初頭にかけてのロシアの相次ぐ戦いの時代の中核にいたことが明確に語られている。

ここで、ミロラドヴィチの生涯と仕事ならびに彼の思想について検討する余裕はないので、二点の指摘にとどめる。一つは、ミロラドヴィチが文学的感性の面ではプーシキンや詩人Ф.Н.グリンカに近く、当時の若き急進的な文学者と感覚を共有していたことである。その意味からすれば、この軍人＝行政官はいわば「文武に引き裂かれた人物」であったと言えるのかもしれない⁴³⁾。そして、もう一点、上記引用文の最後に、埋葬場所の言及があるが、その後、同じアレクサンド

ル・ネフスキイ大修道院の敷地内建物群の一つである聖母告知教会・納骨所に遺骸は移され(1937年)、今はその内部床下にスヴォーロフの横にミロラドヴィチは眠っている。

1829年版では削られた最終の4行は以下の通りだが、削除がミロラドヴィチの偉業を否定するためのものではないことは言うまでもない。

有益なる仕事を成し遂げた者
偉大なるツァーリを支えた者
人々は汝について噂する 幸いなり！と
ネヴァは汝の偉業を言明する！ (428-431)

III

これまでも繰り返し述べたとおり、詩全体のテーマは、エカテリンゴフの春の園遊を再興したミロラドヴィチ賛歌であり、この作品が頌詩として歌われ、頌詩としての特徴を備えていることは間違いない。しかし、細部にこだわって読み直してみると、そのみでは説明しきれない部分が多く見られると考えられる。それをいかに考えたらよいのか。以下、この点について、頌詩の時代史的意味、そして、描写のリアリティ、あるいは作品に見られる習俗史的側面という二つの面から検討してみる。

この作品が書かれた時期ならびに頌詩というジャンルは、ロシア詩史の観点から見て、いかに理解できるだろうか。18世紀前半から半ばにかけて、B.K.トレジャコフスキイならびにM.B.ロモノーソフがロシア詩のための理論と手法を生みだすが、それまでの詩法はギリシャ・ローマの古典詩に依存せざるをえなかった。頌詩について見れば、17世紀にホラチウスを知り、イエズス会(ポーランド風)の抒情詩理論に起源を持ちながらも単調さは免れず、シメオン・ポロツキイを登場させ、そしてA.Д.カンテミールの頌詩がその頂点と言えるにもかかわらず、ロシア詩改革が実現した1730年代初頭までの頌詩は、ホラチウスの模倣とイエズス修道会の詩学の枠を出ることはなかった。

そうした状況を打破したのがトレジャコフスキイである(1734年作「グダンスク降伏に関する荘厳なるオード」、ボアロー論文の改訂版たる理論編「オード一般に関する考察」)。そして、彼に始まるロシア頌詩の展開の背景には、突如成立したかに見える近代国家ロシアの急速な展開に伴う社会変化がある。誕生直後のロシア帝国をめぐる起きた数々の出来事(国家間戦争・戦勝、皇室メンバーの誕生と死、それらに関連した国家的祝祭)、また、新たに再編され「西欧化」した宮廷内の出来事や人間関係、一般社会のさまざまな風俗を歌いあげる上で、頌詩は重要な機能を持った。

⁴¹⁾ 1524年4月20日にイタリアで戦死したが、その後も勇敢な騎士として多くの武勲詩・叙事詩で歌われたので、ロシアでも知名度は高い。ただし、フヴォストフの詩が書かれた時点で二人の「戦死」を重ねる意図があったとは考えにくい。

⁴²⁾ Хвостов (1829 : 236)。

⁴³⁾ Глушин (2004) を参照。

それは、いわば時代と社会の要請によって、詩の中でも欠かせぬ、最新かつ最先端のメディアとなっていたのである。

しかし、エカテリーナ大帝期において、ロシアはそれまでの宮廷オリエンテート社会から「大衆化」していくことになる。それにともなって頌詩もまた、当初の時代的機能を失い始めた。ロモノーソフ、A.Π.スマローコフ、そしてΓ.P.デルジャーヴィンを18世紀後半のロシア頌詩の嚆矢として、急速に他のジャンル（例えば、抒情詩）に道を譲ることとなった。おそらく、ヴァゼムスキイが指導した《アルザマス会》ならびにプーシキンは、そうした頌詩の「機能喪失」をいち早く感じ取り、フヴォストフを嘲笑の対象としたと思われる。その意味から見れば、フヴォストフは、ロシア頌詩の最終（むしろ、その幕を下ろした）段階を飾る詩人であったかもしれない。18世紀末から19世紀前半にかけてのロシア社会の「変容」と「転換」の中で、再生された祝祭と権力者に向けた頌詩にしがみついた旧世代詩人の精神は計り知れないものがある。

フヴォストフの詩に戻ろう。そこには、エカテリンゴフの園内には実際に存在しながらも、詩には描かれない建物・施設もある。例えば、「ストウギン橋」「コーヒー館」（居酒屋との表記あり）、「子供の庭」に並び立つ「マブリタン・パビリオン」、「ケグリヤ（ロシア式ボーリング）場」がそれらであるが、全体として見れば、詩人の視線はほぼすべての建物・施設に及んでいて、しかも描写は短い、的確である。描かれた園内散策のコースも、むしろ、詩人は実際に歩いて回ったはずだが、自然で説得性が大きい。

400行を越える長詩の組み立てと流れは比較的単純だが、ある意味で巧みに熟練した手際によって十分練られている。春という季節→帝都の有り様→街外れの祝宴へ向かう乗物と人々→凱旋門からの祭りの場への入場→祭りの様子→詩神の覚醒→祭りの歴史→園内施設巡り→ミロラドヴィチ讃美へ、という展開は、さらに要約すれば、三ないし四部からなるとも言えるが、全体構成は明快である。それに対応する個々の詩作表現も巧みと思われる。

こうした印象を与えるのは、何よりも詩人の「冷めた」描写によるものであろう。例えば、水陸双方から園遊に向かう人々の喧騒と混乱ぶり、乗物をはじめとして園内各施設・個々の建物の具体性、飲食や娯楽の観察・描写の「忠実さ」、パーク内周遊の仕方と方向等々それらが、頌詩の枠を越えて、時に対象そのものへ傾斜していく様は、ある意味でリアリスティックと

さえ言える。先に、祭りの場に突進する人々や馬車の転倒ぶりについて言及した際、ルポルタージュ的としたのはその意味であり、それらは時に習俗史的記述へと通ずる。ここでは、本来ならば、習俗史の意味について述べなければならないが、それを例えば、時代と社会の事件性＝今日性への「反応」とでも呼んでおくとすれば、フヴォストフが再生なったばかりの祝祭に対応し、そして、同じく彼が祝祭からわずか半年後に帝都を襲った大洪水という事件に誰よりも最初に反応した作品「1824年11月7日に起こったペトロボリの洪水に関するN.N.に向けた書簡詩」（1824、検閲許可は同年12月4日）を発表したことに大きなヒントがあると考えられる。プーシキンの「青銅の騎士」の創作契機の重要な一つとなった⁴⁴⁾と考えられるこのフヴォストフの洪水詩について検討する余裕はないが、老詩人が最大の同時代トピックに挑んだことの意味はきわめて大きい。

社会的事件に反応するのは、かつて18世紀ないしは19世紀初頭までの古典的詩人の常であり、彼らが戦勝、戴冠、誕生、死去等々に詩を求められたし、自らもそれらに詩を捧げたのにたいして、今やロシア社会は一般庶民が広場や街道、庭園内を自由に往来するものとなっていた。そのことは、かつては皇室ならびに上流貴族の屋敷や庭園が所有者たちによりのみ開放されていたのにたいし、18世紀末からは、庶民にも入場が許可されていた、グリャーニエの特徴の変容の歴史に明確に対応するものである。

フヴォストフは18世紀の古典的な頌詩詩人からはみ出し、その枠を踏み越えてしまったのかもしれない。そして、この詩人の筆が、彼の意図とテーマとは逸れて、心ならずも、祝祭の細部や祭りに押し掛ける庶民の姿を切り取ってしまったのを読む時、そこには、時代変化の大きなうねりが感じられるのは本稿著者だけだろうか。

近年、このエカテリンゴフの場と園遊の歴史、各時代における具体相、設営・管理と機能等についてまとめた研究成果が次々と発表されていることは、本稿の冒頭で記した。それらの中でも高く評価できるのがB.И.ホダノヴィチ『エカテリンゴフ概史』（2011）⁴⁵⁾である。しかし、可能な限りの資料にあたったこの労作で著者が、フヴォストフの上記の詩が「歴史的典拠とする意味がない」としていることは大きな疑問を感じざるをえない。

資料に対する狭義の実証性を目ざすことを前提としながら、その先に進むべく、テキストへの文化史的コ

⁴⁴⁾ 大洪水から間もない1824年11-12月段階で完成し出版されたフヴォストフの詩が、大事故をテーマとした文字通り最初の作品であったことから、社会の注目を集めたことは当然であるが、プーシキンがそれを入手したかったことはよく知られている（ただし、彼の蔵書にはない）。プーシキンは『青銅の騎士』において、フヴォストフを「天に愛でられた詩人」とし、「不滅の作品」としたことの説明については、当時から多くの議論がある。詳細は「文学の記念碑」版『青銅の騎士』（1978）の注釈（268-269、注釈者はソビエトの代表的なプーシキン学者H.B.イズマイロフ）を参照のこと。

⁴⁵⁾ Ходанович (2011).

メンタリイを付すという方向性は⁴⁶⁾、フヴォストフ作品を、エカテリンゴフを舞台とした文化現象、ならびに、それに関する多くの社会的言説を知る上で重要なテキストとしてとらえ直すという点において有効と思われる。

文献リスト

- Алексеева Н.Ю. (2013) «Сочинения и переводы как стихами, так и прозой» в творчестве В.К. Тредиаковского//Василий Тредиаковский. Сочинения и переводы как стихами, так и прозой. 2-е издание. СПб.
- Алексеева Н.Ю. (2003) Ода//Три века Санкт-Петербурга в трех томах. Т.1, Осьмнадцатое столетие. Кн.2. Н-Я. М.
- Алянский Ю.Л. (2003) Увеселительные заведения старого Петербурга. СПб.
- Андреев А.И. (1995) Остров Екатерингоф//Невский архив: Историко-краеведческий сборник, 2. М.-СПб.
- Анисимов Е.В. (2004) Царь и город. СПб.
- Балакин А.Ю. (2011) Пушкин-читатель графа Хвостова//Западный сборник. В честь 80-летия П.Р.Забова. СПб.
- Баторевич Н.И. (2006) Екатерингоф. История дворцово-паркового ансамбля. СПб.
- Бондаренко А. (2008) Милорадович. М.
- Булгарин Ф.В. (1825) Прогулка в Екатерингоф 1-го мая // Петербургские очерки Ф.В.Булгарина. СПб., 2010.
- Виницкий И.Ю. (2017) Граф Сардинский. Дмитрий Хвостов и русская культура. М.
- Глезеров С.Е. (2004) Исторические районы СПб. СПб.
- Глушкин О.Б. (2004) Граф Милорадович в битвах и среди поэтов. Калининград.
- Гоголь Н.В. (1979) Собрание сочинений в семи томах. Т.7. Письма. М.
- Горбатенко С.Б. (2002) Петергофская дорога. СПб.
- Горбатенко С.Б. (2003) Новый Амстердам. СПб.
- Греч А.Н. (1851) Весь Петербург в кармане. СПб.
- Греч Н.И. (1886) Записки о моей жизни. М., 1990.
- Дубяго Т.В. (1953) Усадьбы петровского времени в окрестностях Петербурга // Архитектурное наследство, 4. Л.-М.
- Дубяго Т.В. (1963) Русские регулярные сады и парки. Л.
- Западов А.В. (1938) Пушкин и Хвостов. Из архива Хвостова // Литературный архив. Т.1. М.-Л.
- Зуев Г.И. (2004) Нарвская застава. На перепутье трех веков. М.
- Конечный А.М. (1985) Петербургские народные гулянья и развлечения. Конец XVIII-начало XX в.// Советская этнография. No.4.
- Кормильцева О.М. (1981) Парк имени 30-летия

- ВЛКСМ // Сады и парки Ленинграда. Сост. В.П. Иванова. Л.
- Кормильцева О.М. Сорокина П.Е. Кишук А.А. (2004) Екатерингоф. СПб.
- Корнеев А.В. (1990) Хвостов // Русские писатели. Биобиблиографический словарь. М.-Я. М.
- Кулагин А.В. (1996) «Надпись к воротам Екатерингофа»//Временник Пушкинской комиссии. Вып.27. СПб.
- Морозов П.О. (1892) Граф Д.И.Хвостов, 1757-1835 // Русская старина. Т.74 и 75.
- Подробный план СПб (1828) Подробный план столичного города С.Петербурга 1828 года ген.-майора Шуберта. СПб.
- Пыляев М.И. (1997) Старый Петербург. М.
- Сады и парки СПб. 19-начало 20 века (2004). М.-СПб.
- Столянский П.Н. (1913) Старый Петербург. Садоводство и цветоводство в Петербурге 18 века. СПб.
- Столянский П.Н. (1923) Петергофская перспектива. СПб.
- Тынянов Ю.Н. (1922) «Ода его сиятельству графу Хвостову» // Пушкинский сборник памяти С.А.Венгера. М.
- Тынянов Ю.Н. (1929) Ода как ораторский жанр // Архаисты и новаторы. Л.
- Федоров Б. (1824) Гулянье в Екатерингофе // Отечественные записки. Ч. 18. No.49
- Хвостов Д.И. (1824) Майское гулянье в Екатерингофе. СПб.
- Хвостов Д.И. (1829) Полное собрание стихотворений графа Хвостова. Т.2, СПб.
- Хвостов Д.И. (1997) Избранные сочинения графа Хвостова. М.
- Ходанович В.И. (2011) Очерки истории Екатерингофа. XIX-первая половина XX века. Монография. СПб.
- Ходанович В.И. (2013) Екатерингоф. От императорской резиденции до рабочей окраины. М.
- Чеканова О.А. (2004) Екатерингоф // Санкт-Петербург. Энциклопедия. СПб.
- Чеканова О.А. Ротач А.Л. (1990) Огюст Монферран. Л.
- Цылов Н. (1849) Атлас тринадцати частей С.Петербурга. СПб.
- Шуйский В.К. (2005) Огюст Монферран. М.-СПб.

- 坂内 (2016) 坂内徳明 「グリーニエ (民衆遊歩) の発見—ソビエト末期におけるロシア民衆文化史研究の始まり」『放送大学研究年報』34号
- 坂内 (2017) 坂内徳明 「エカテリンゴフ園遊パノラマ論考—K.ガンベリンの絵巻図 (1824-1825) に対するコメントリイを通して」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』No.38

(2017年11月14日受理)

⁴⁶⁾ この点は、冒頭で紹介したプーシキン作と考えられている4行詩に対する周到な論考を展開したクラーギンの「リアルで、文化的なより広いコメントリイ」(Кулагин, 1996: 108)と同じ視点に立つと考えられる。

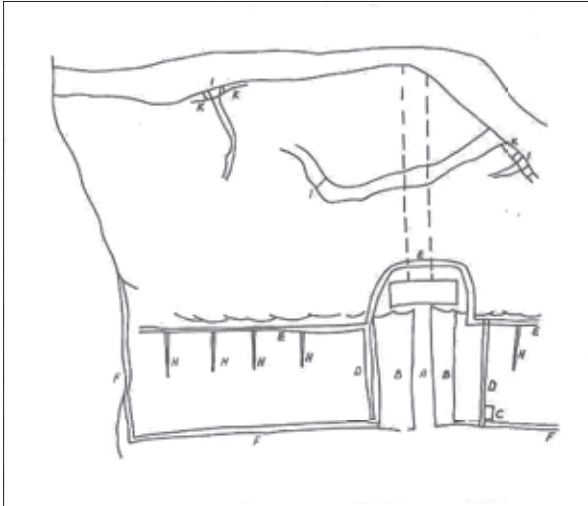


図1 ピョートル大帝によるエカテリンゴフ設計図エスキース (1712 出典Горбаченко 1997)

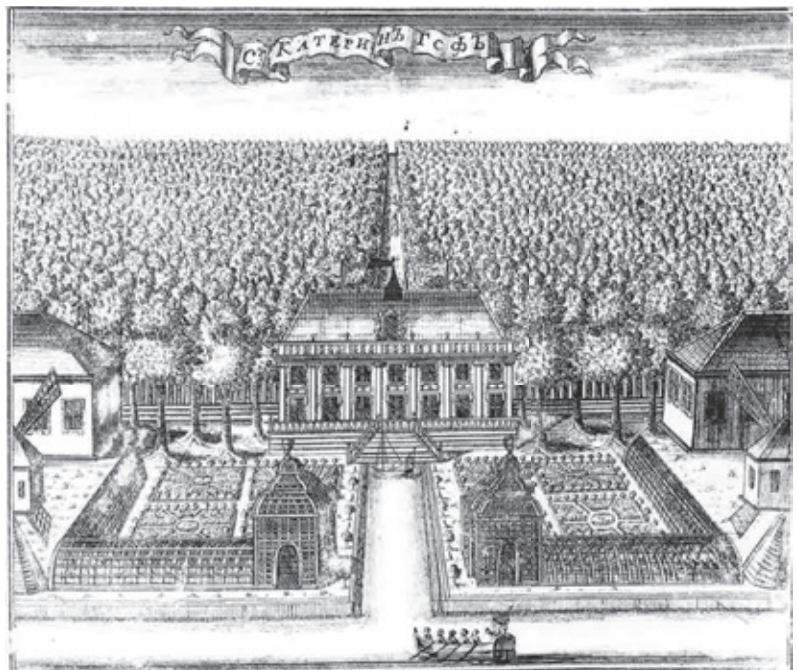


図2 初期のエカテリンゴフ
(1716 А.И.Ростовцев版画)



図6 散歩するプーシキンとフヴォストフ
(1830 П.И.Челищевチョーク画)



図7 「天に愛されたフヴォストフ伯爵」
(1915 アレクサンドル・ベヌアのプーシキン作『青銅の騎士』のイラストレーション)

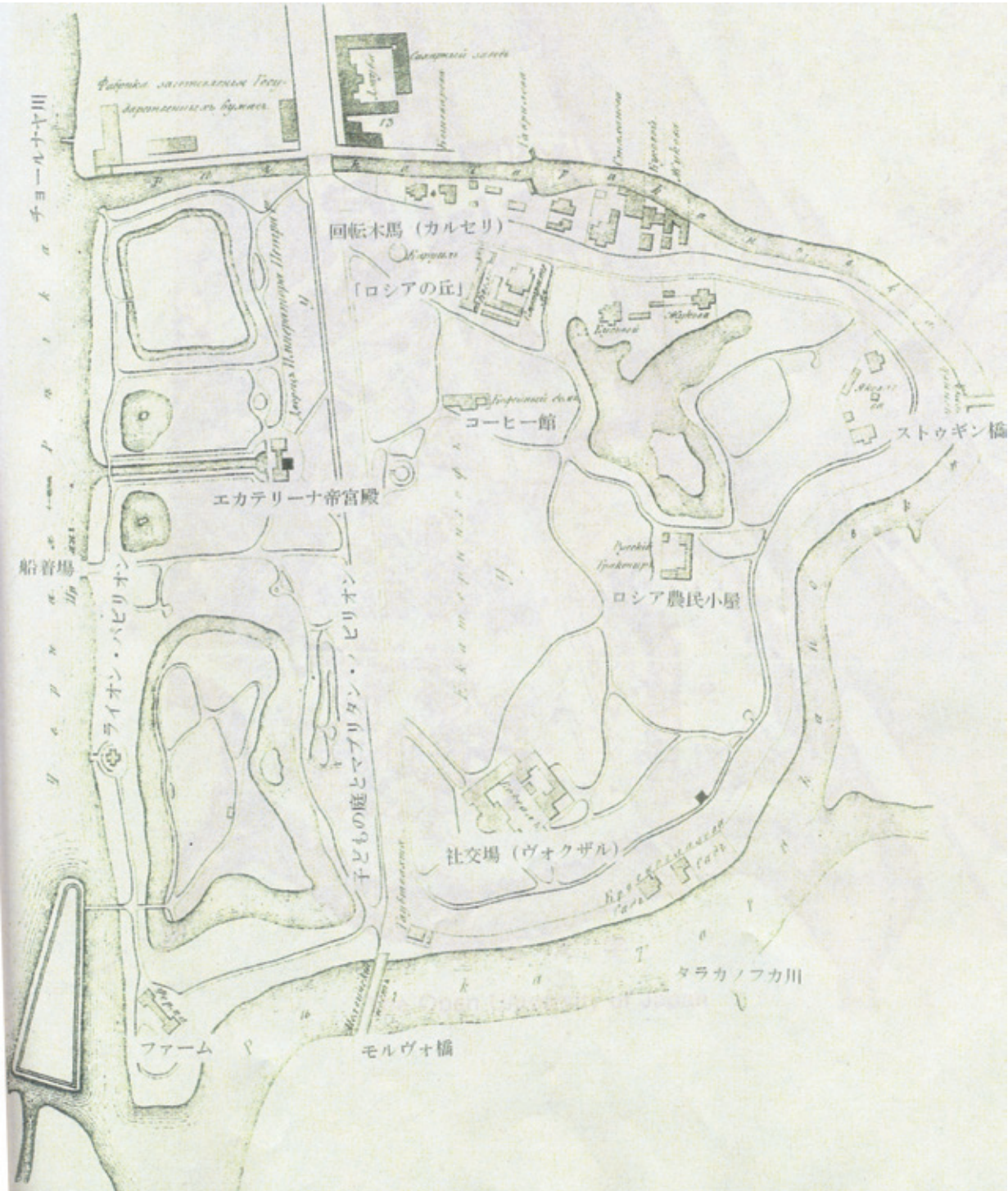


図4 エカテリンゴフ全体図 (出典Цылов 1849)

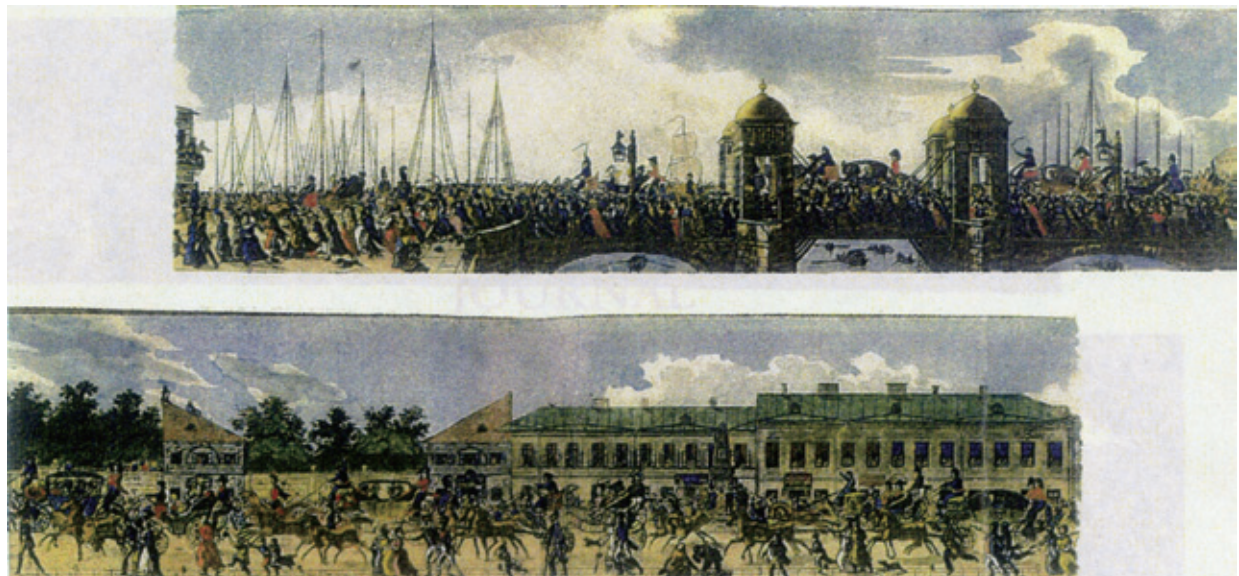


図 5-1 ガンペリン「エカテリンゴフ・グリャーニエのパノラマ」部分一祭に向かう列

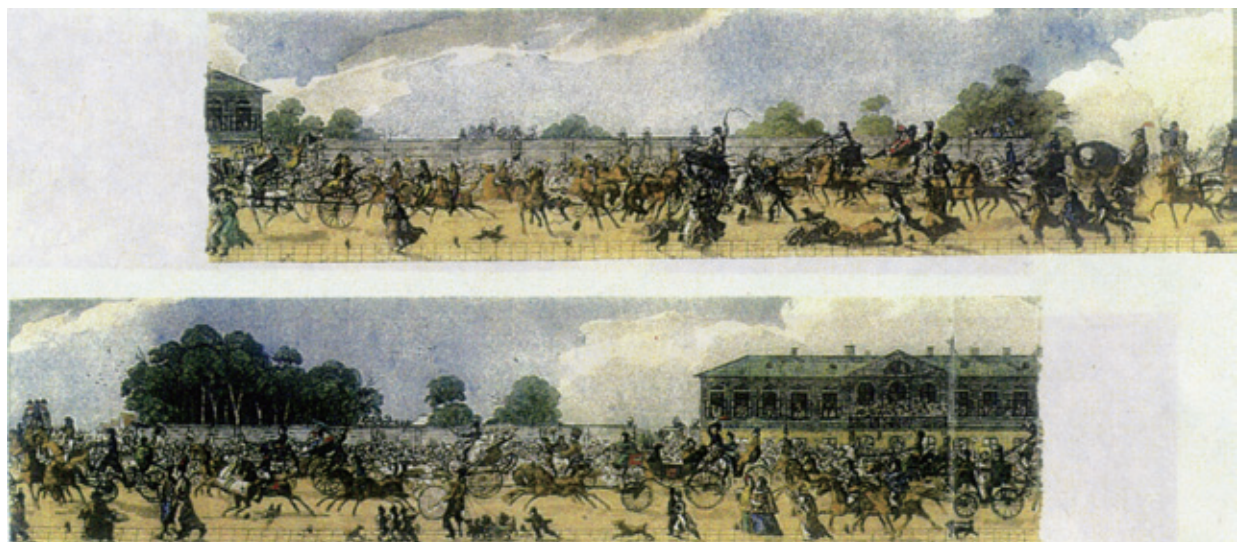




図 5-2 ガンペリン「エカテリンゴフ・グリャーニエのパノラマ」部分—祝祭の場

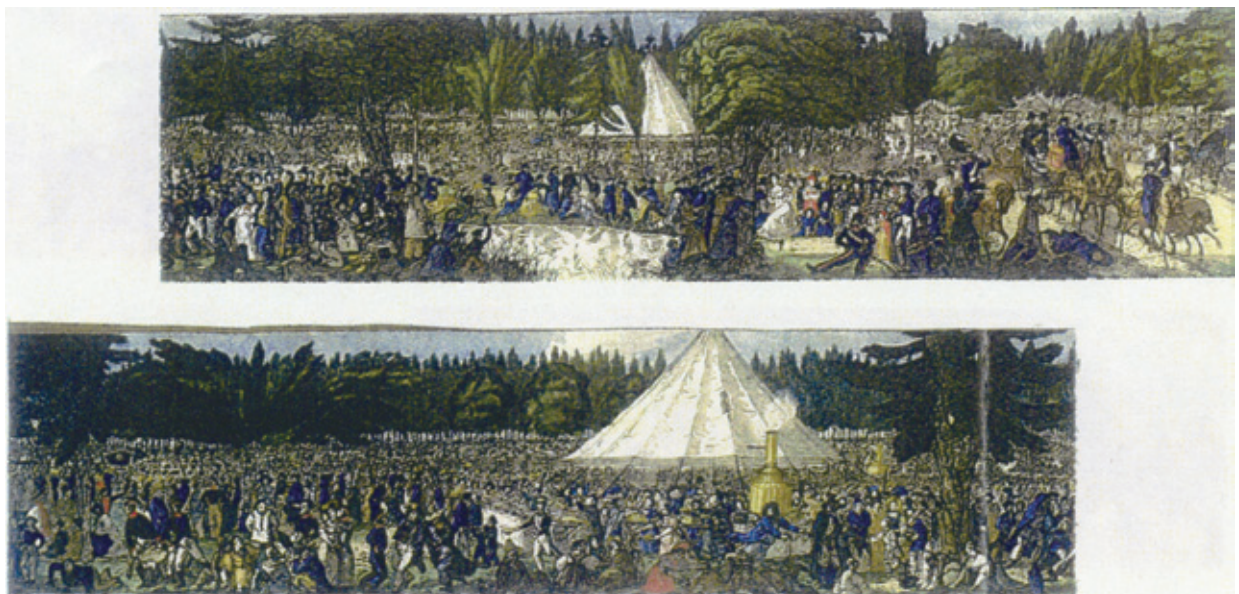




図8 エカテリーナ帝宮殿（20世紀初頭の写真）



図9 ライオン・パビリオン

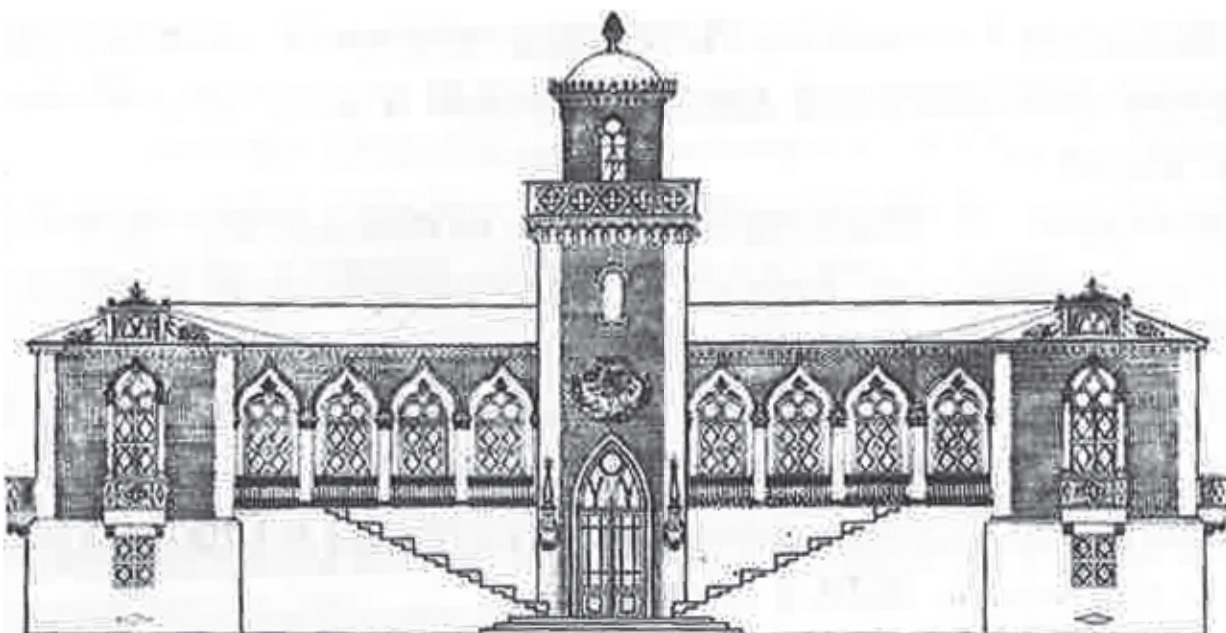


図10 ファーム



図11 エメリヤノフカから見たファーム



図12 社交場（ヴォクザル）



図13 ロシア農民小屋



図14 子どもの庭とマブリタン・パビリオン

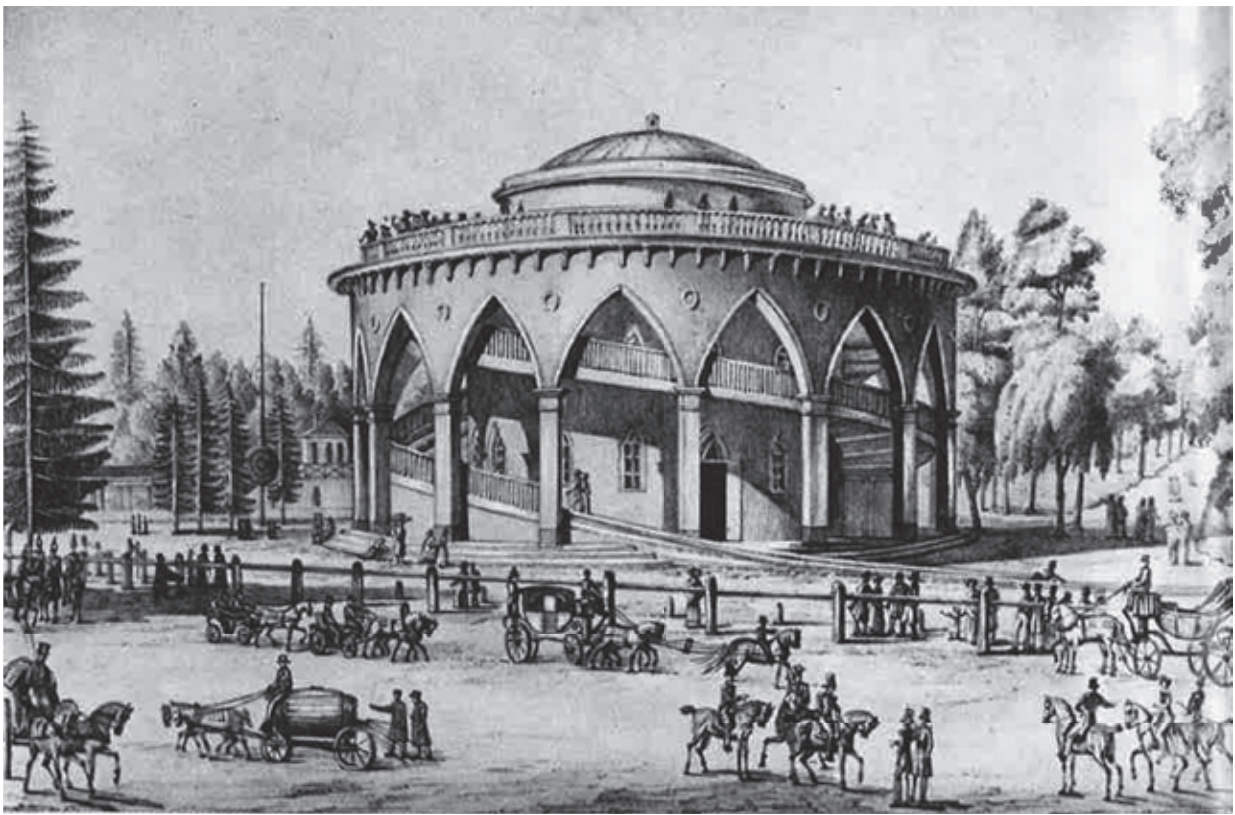


図15 「ロシアの丘」

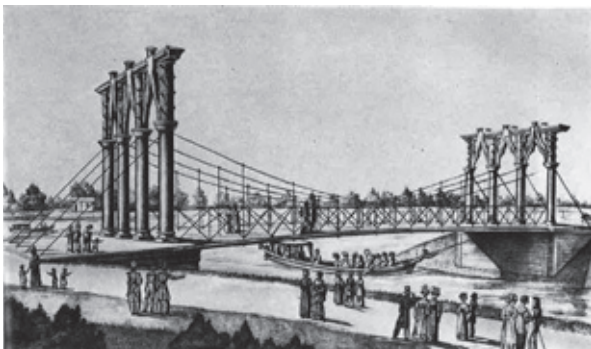


図16 モルヴォ橋